

オペラ「クリスピーノ」とグリムの「死神」のルーツ

ここで、いくつかの新たな疑問が発生するのだが、まず、オペラ「クリスピーノ」とグリムの「死神の名づけ親」との関係を考えてみよう。両者の距離は、グリムと落語との距離に比べれば大きいだが、両者に共通点が多いのは確かであるからだ。年代から見れば、グリム童話集の初版は一八二二年、オペラ「クリスピーノ」は一八五〇年の作曲であるから、グリムからオペラが作られたようにも思えるが、両者が、共通のルーツを持つ並列関係の作品である可能性も考えられる。

(落合)にあるボルテとポリーフカの「グリム童話集への注解集」からの引用によると、一八二五年に、サルヴァトーレ・ファブリケージによって「医者と死神、或いは靴直し(出身)名医クリスピーノの五日間」という喜劇が作られているようであり、どうやら、これが、オペラ「クリスピーノ」の原作らしい。さらに、すでに、一五五〇年のイタリアのフォルテグエリイの短編小説の中で、名づけ親の女の死神が名づけ子を医者にする話があり、親夫婦を通じて、病人の生死の見分け方を教えることになっている。ここでは、死神が頭の

方にいたら助からず、足元にいれば助かるとなっている。これは、落語「死神」の設定と同じであるが、死神が女である点は、イタリア作品の特徴であり、これが、「クリスピーノ」のルーツである可能性が高いと思われる。

一方、同じ(落合)にドイツ語のまま引用されている「注解集」の別の記述を読んでみると、一五四七年には、ハンス・ザックスに「百姓と死神」という詩作品があり、ここでは、神様が、その不公平ゆえに、名づけ親を断られ、死神が選ばれるという設定がすでに出来あがっている。また、ヤーコプ・アイラーの「百姓と死神」では、死神が足元に立っていたら病人は助からないという設定もある。明らかに、グリムの「死神」は、この流れにのっており、イタリアでの流れとは独立した流れを作っているように思われる。つまり、一六世紀には、「死神メルヘン」が、すでに、ドイツとイタリアで、独立した流れを作っており、したがって、断言はできないものの、グリムと「クリスピーノ」は、共通のルーツを持つ、並列関係の作品である可能性が高いように思われる。

では、グリムと「クリスピーノ」の共通のルーツたる死神メルヘンは、どこで発生し、どのように伝播していったのだろうか。(落合)は、前述のフォルテグエリイの作品に目を